



Title	基礎工学部生向けESP指導のための専門連携のあり方に関する一考察
Author(s)	草ヶ谷, 順子
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2006, 2, p. 13-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4142
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

基礎工学部生向けESP指導のための専門連携のあり方に関する一考察

草ヶ谷 順子

A Study on Effective English Classes for Students of School of Engineering Sciences

Junko KUSAGAYA

There are strong demands for effective English communication skills for the students of School of Engineering Sciences in the current globalized environment. Although, it is found that many of them are not very good at communication and generally lack the proficiency they need to meet. To examine possible solutions for this serious problem, three steps were taken in this report. First, the results of questionnaire survey responded by students and faculty staff, TOEFL scores, and vocabulary quiz scores were used to observe the students' current English proficiency. Then, the goals that the students should set are considered. Finally, some possible ways to conduct effective English classes for those students are proposed.

1. はじめに

筆者が平成17年7月に基礎工学研究科教員と英語教育に関して談話していたところ、次のような感想が出た。「英語力＝（イコール）研究力とまで言われている。ところが、研究室に配属されてくる4回生の英語力は、必要とされるレベルに達しておらず、学生も教員も大変苦労している」。そこで本稿では、こうした現状を打破することを目標に、現在の基礎工学部生の英語力の現状、そして学生が目標とすべきレベルを分析するとともに、その両者の隔たりを埋めるための方策について考察する。

2. 学部生の英語力の現状

2.1 自己分析アンケートによる学部1回生の英語力

まず、学生の英語力の現状を観察するため、平成17年4月14日、筆者が授業（英語420）を担当している基礎工学部1回生47名を対象に、英語力に関するアンケート調査を実施した。その結果を図-1および図-2に示す。

学生の回答結果を見ると、自分のリスニング力に関して、「①全くと言ってよいほど英語は聞き取れない」、「②簡単な挨拶程度」あるいは「③単純な内容の日常会

話しか理解できない」レベルであると回答した割合が92%であった（図-1参照）。「④映画やドラマの中で話される会話」や「⑥講義や講演」が理解できるレベルと自己評価した学生が各2%となっているが、これは小学校3年から6年間アメリカに居住していた学生が複数回答をした結果である。そのため、この学生を例外と捉えれば、受講生全員が「単純な内容の日常会話」しか理解できないということになる。

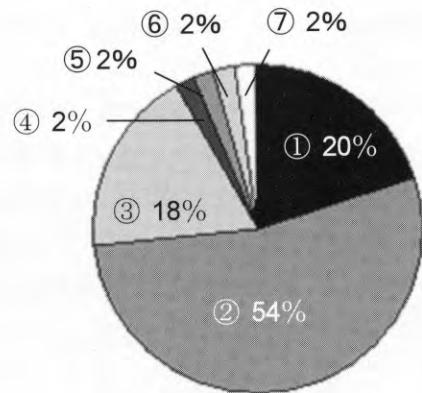


図-1 英語リスニング力の自己評価

「英語を聞いて理解する力を次のどのレベルだと自己評価していますか」（複数回答）

- ① 全くと言ってよいほど英語は聞き取れない
- ② 簡単な挨拶程度

- ③単純な内容の日常会話
- ④映画やドラマの中で話される会話
- ⑤かなり複雑な内容の会話
- ⑥講義や講演
- ⑦ラジオやテレビのニュース

つぎに、図-2に示したスピーキング力についての回答を見てみると、「①ほとんどできない」または「②わずかだけできる」と回答した学生が96%であり、大方の学生が自分の意見や考えを表現することに自信がないという現状が浮き彫りになった。

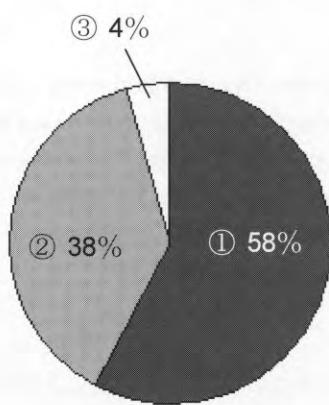


図-2 英語スピーキング力の自己評価

「自分の意見や考えをどの程度英語で話せると自己評価していますか」

- ①ほとんどできない（言いたいことの20%以下）
- ②わずかだけできる（30%くらい）
- ③ある程度できる（60%くらい）
- ④かなりの程度できる（80%くらい）
- ⑤ほとんど問題なくできる（81%以上）

ただし、このアンケートは学生自身が行った自己評価であるため、過小評価あるいは過大評価し、事実とそぐわない結果が出ている可能性もある。そこで次項以降、教員の目から見た学生の英語力の評価、およびTOEFLや語彙テストを用いた客観的評価についてあわせて見ていく。

2.2 本学教員対象のアンケート回答による学生の英語力の現状

平成7年3月に、大阪大学言語文化部カリキュラム検討委員会（当時）が本学1,700名の教員を対象に外国語教育に関するアンケート調査を実施している（回答者数889名、回収率52.3%）。そこで表明された教員の意見を

抜粋する。

- 学部4回生、大学院生が、殆ど全くといってよいほど、外国語の文献を読みません。まして、書くことも出来ません。

● 阪大理生物で主たる活動は大学院での研究・教育です。研究成果は欧米のジャーナルに投稿します。従って英語の表現能力が大学院生に強く要求されている。学部レベルでは勿論そんな能力はないが、大学院で5年間かけて能力を育てても、本人が努力しても間に合わない。阪大生の英語の能力はかなり低い。語学教育とはそこにテコいれをするものでしょう。…大学院での英語表現はtechnical termを並べればよいと考えてもらったら大まちがいです。論文は自分の考えの全体像を的確に表現するものでなければならない。阪大生を、このここまでを含めて大学院5年間で教育するのは正直言って骨が折れます。学部までの能力の倍増を強く望みます。

- 私は当理学部で長年教官をしていますが、今までにまともに英語を話せる学生に会ったことがありません。多くの学生は英語で書かれた化学の教科書をきれいな発音で音読できます。しかし話し言葉として文を作ることができるものでは、例外的な存在であり、持続した会話を英語でできる学生にいたっては皆無です。なぜこのようなことになるのでしょうか、常々疑問に思います。

教員から出ている厳しい意見を引用したが、客観的数值で見ると学生の英語力はどの程度の習熟度レベルであるかを次項で観察する。

2.3 TOEFLスコアによる学生の英語力の現状

本項では、本学において平成15年度より1回生を対象に実施されているTOEFL Paper-Based Test (PBT) のスコアから学生の英語力の現状を観察する (TOEFL-PBTのスコアレンジは677~310点)。

筆者の授業を受講している学生のうち、平成17年7月9日に実施されたTOEFL-PBT Institutional Testing Programを受験した44名の平均スコアは463点であった。また、平成16年度の基礎工学部1回生（受験者439名、受験率97.6%）の平均スコアは461点、平成15年度（受験者431名、受験率96%）の平均は456点と公表されており、毎

年460点前後であることがわかる。

また平均スコアだけでなく、図-3のヒストグラムでスコア分布を見ても、三者のばらつきは類似しているの

で、基礎工学部1回生の英語力の習熟度は、少なくともこの3年間は毎年大差ないと推定できる。

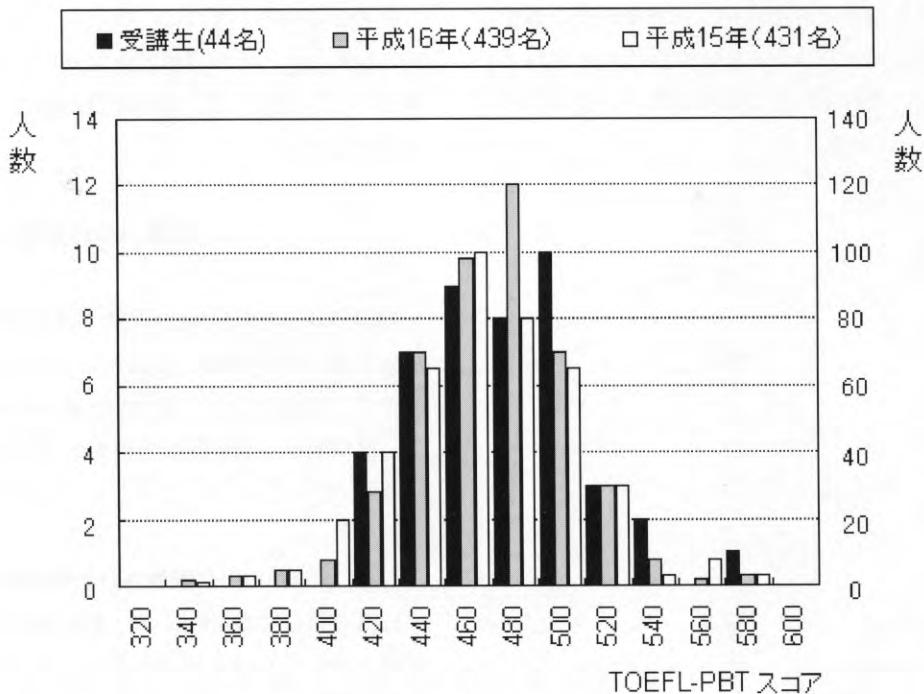


図-3 平成15, 16, 17年度の基礎工学部1回生のTOEFLスコア分布図

このTOEFL460点というレベルがどの程度の英語力かというガイドラインはTOEFL実施機関であるEducational Testing Serviceからは公表されていないが、仮にTOEIC運営委員会が以前公表していた換算式（TOEFLスコア=TOEICスコア×0.348+296）で換算すると、TOEFL 460≈TOEIC 471となる。そしてこのスコアは、TOEIC公式ホームページ記載の「TOEICスコアが表す英語コミュニケーション能力」では、レベルDに近いレベルCにあたる。

レベルC (TOEIC 470~729)

日常会話のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。通常会話であれば、要点を理解し、応答にも支障はない。複雑な場面における的確な対応や意思疎通になると、巧拙の差が見られる。基本的な文法事項・構文は身についており、表現力の不足はあっても、ともかく自己の意思を伝える語彙を備えている。

レベルD (TOEIC 220~469)

通常会話で最低限のコミュニケーションができる。ゆっくり話してもらうか、繰り返しや言い換えをしてもらえば、簡単な会話は理解できる。身近な話題であれば応答も可能。語彙・文法・構文ともに不十分などこ

ろは多いが、相手が外国人に特別な配慮をしてくれる場合には意思疎通をはかることができる。

TOEICとTOEFLは元々同じテスト作成機関（Educational Testing Service）が開発したものであり、TOEICとTOEFL-PBTのテスト形式は類似している。TOEFLが英語圏の大学に留学するための英語力があるかどうかを評価することを目的とするのに対して、TOEICはビジネスの場面でのコミュニケーション能力を評価する試験なので、TOEIC用のガイドラインをそのまま使用するわけにはいかないが、TOEFLスコアが示すおおよその英語の習熟度レベルを知るには参考になるだろう。

2.4 学生の英語語彙力の現状

筆者が担当している基礎工学部生向けのクラスでは、*Everything You Need To Know About Science Homework*という英語圏の小学校高学年向けに書かれた教科書をサブテキストとして使用している。これは、本学の基礎工学部の教授および基礎工学部の学生と議論し、学部1回生であればこの程度の英語を身につけておくべきだということで選定されたものである。受講生からは、「内容に興味が持てる」、「簡潔な英語で書かれていて読みやすい」、

「イラストが豊富で内容理解の助けになる」などと好意的な感想が多く聞かれるが、その一方で、「単語が難しいので、辞書なしでは読めない」という感想も散見される。そこで、テキストの"Wake-Up Call"というコラムから14の語彙または連語を音声で提示し、学生にその意味を書かせることで、1つのコラムにどの程度の未知語があるかを調査した。それぞれの正答率は以下の通りである。

正答率	
	0 (%)
① diurnal	0
② nocturnal	2
③ daylight	60
④ herbivore	0
⑤ prey	21
⑥ predator	5
⑦ owl	2
⑧ leopard	2
⑨ adapt	67
⑩ night-roaming creature	40
⑪ desert dweller	2
⑫ at rest	5
⑬ wander about	7
⑭ scorching sun	0

これらの語彙または連語のうち、正答率30%以下であった11個（延べ18語）を空欄にすると以下のようになる。

① animals are active during the day and sleep at night.
 ② animals are active during the night and sleep during the day. Most animals are ①. It's easier to see in daylight than in the dark, so it's easier to find food. But it's also easier to be seen, and many ④ are easy ⑤ during the daylight hours. So mice and other prey animals look for food at night. Some ⑥, such as ⑦ and ⑧, have adapted to ② life in order to ⑤ on night-roaming creatures. Still other animals, such as ⑪, are forced by climate to remain ⑫ during the day and avoid ⑬ under the ⑭.

(Everything You Need To Know About Science
 Homework, p.34)

このように、文章を構成する116語のうち18語がわから

らないとすると、6～7語に1語の割合で未知の語があることになる。未知語は、「背景知識が豊富にある場合、20語に1語以下の割合でなければ正しく推測し、内容を理解することができない」（羽鳥他, 1979；Nation, 1990）と言われている。このことから、内容に興味を持ち積極的に読解しようとする姿勢を見せており受講生の意欲を無にしないためには、適切な語彙指導を行う必要があることが伺える。

3. 英語力の到達目標

前項では、基礎工学部1回生の英語力の現状について、学生自身の自己評価、教員の目から見た評価、TOEFLスコア、語彙力という4つの側面から観察した。本項では、同側面から最終的な英語力の到達目標について考察する。

3. 1 アンケートに表明された学生の英語学習の目的

目標を設定するためには、まず学生の英語学習の目的を明らかにしなければならない。そこで受講生に、「これから英語の学習を続けるにあたって、どのような目的を実現させようと思っていますか」（複数回答）と尋ねた結果、もっと多かったのが「⑤専攻分野の研究活動のため」（29%）という回答であった。次に、約20%の学生が、「①希望する職種に就くため」、「②英語の資格試験を受けるため」、「④将来、海外で仕事をするため」を英語学習の目的として挙げている（図-4参照）。

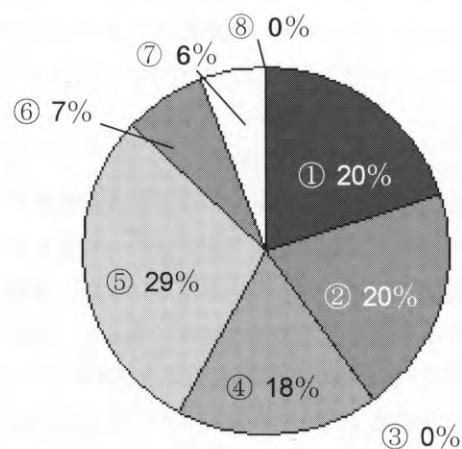


図-4 英語学習の目的（複数回答）

- ①希望する職種に就くため
- ②英語の資格試験を受けるため
- ③将来、英語圏の国に移住するため
- ④将来、海外で仕事をするため

- ⑤専攻分野の研究活動のため
- ⑥欧米の大学に留学するため
- ⑦留学生などと友達になるため
- ⑧特になし

学生自身の自己評価では、リスニングに関しては「単純な内容の日常会話」まで、スピーキングに関しては「わずかだけ出来る」と回答している学生であるが（2.1項参照）、目標は非常に高いことがわかる。

3. 2 本学教員対象のアンケートに見る要望

2. 2項にも引用したアンケート調査への回答の中で、基礎工学部生の到達目標と関係のある記述を抜粋する。

- 理系の学生に必要なのは 99.9% 英語です。それも実用的な英語。現実に即した英語教育をして下さい。
- 大学を卒業する者にとって、第 1 外国語は国際人としての基礎能力として評価される。この場合、工学系学生にとっては、第 1 に外国語の文献を読めること、第 2 に自分の研究成果を第 1 外国語で書けること、そして願わくは第 3 に discussion できることである。したがって、第 1 外国語の教育に専門に近い分野の参考書ができるだけ多く勉強させて欲しい。
- 理科系の学生としては、実用的な英文（英語科学論文等）を読み、書き、さらにそれについて英語でディスカッション（聞き、話す）する力をつけることが絶対に必要である。

基礎工学部の教授の話でも、論文や国際学会での使用言語が英語であることは当然として、国内で開催される学会も原則的に英語での口頭発表にするという動きがあるようだ。こうしたことからも、専門分野の研究活動において実用となる英語力を養成することが、教員の目から見た学生の持つべき目標の 1 つと考えられるだろう。

3. 3 TOEFLスコアを指標とした目標

TOEFL の信頼性や妥当性に関する議論は以前からあるが、TOEFL よりも優れた具体的な代替物がなく、現状では英語力を評価するもっとも妥当な客観テストとして世界的に認知されていると言えよう。

本学の大学間協定校でも、33 の大学または学部が、要求する語学能力を示すために TOEFL のスコアを挙げて

いる。一般的に、学部レベルに留学するためには 550 点、大学院レベルならば 600 点を取得することが必要だと言われているが、調査の結果、33 の協定校の示す最低ラインは 530 ~ 620 と幅広く、そのうち 16 の学部または大学が 550 点というスコアを挙げていた。このため、TOEFL 550 点を学部生の 1 つの目標と考えてよいだろう。

一方、2. 3 項に示したように、基礎工学部 1 回生の平均は約 460 点なので、目標（550 点）との差は約 90 点ということになる。このギャップは小さく見えるかもしれないが、実は相当な学習時間を必要とすることが推定される。たとえば、TOEIC 運営委員会によると、TOEIC のスコアを 100 点上げるには英会話学校等で約 230 時間の時間がかかると報告しており、それを TOEFL に換算すると、90 点上げるには約 690 時間かかることになるのである。ところが、基礎工学部で必修科目として課されている英語は、1 ~ 4 セメスターに週 2 コマずつ配されているので、2 年間で 180 時間（= 90 分 × 15 回 × 2 × 4）しか費やされていないことになる。つまり、目標到達まで約 690 時間かかると推定されている中で、授業では 180 時間しか費やされないのである。このことから、現状 TOEFL 460 点レベルの学生を、2 年間、8 単位の必修科目だけで 550 点に到達させることは極めて難しいと言える。

3. 4 語彙力を指標とした目標

言語運用力の最重要要素の一つとしての語彙力養成の問題がある。Nation (1990) や羽鳥 (1979) の「第 2 言語学習者が意味を推測することが可能な未知語の含有率は 20 語に 1 語程度である」という提唱や、英語総合力と語彙力の相関式（竹蓋, 2000）に基づいて計算すると、実用コミュニケーション（TOEFL 550 レベル）を行うには最低 7,000 語の高頻度の語彙力が必要ということになる。

ところが、平均的な大学生の語彙力は 2,000 ~ 3,000 語に過ぎないと推定されている（Shilaw 1995, 中西他 1995, 山内 1996, Barrow 1999）。筆者の担当するクラスの受講生の現状を見ても、英語圏の小学生向けテキストで平均 6 ~ 7 語に 1 語の割合で未知の語があることが判明おり（2. 4 項参照），さらに同受講生を対象としたアンケートで、「自分の英語力が満足するレベルに達していないのは、語彙力がないからだ」と 87% の学生が自己分析している。

このようなことから、必要とされる数千という語彙を、偶発的に学習者が習得するのを期待するのではなく、適

切な、効率のよい語彙指導を行うことが不可欠であると考える。

4. 目標に到達させるための方策

前項で考察した目標まで学生を到達させるためには、学部3回生以降にも学生が希望する内容の英語授業を数多く提供することや、e-Learningを効果的に実践することにより学習機会を増やすことなどが挙げられる。その他、考えうる方策には枚挙に暇がないが、本項では、学生のニーズや興味、専攻分野を考慮した教材を選定すること、および、英語教師と基礎工学部の教師が緊密に連携して授業を成立させること、という2点を取り上げる。

4.1 学生のニーズ、興味、専攻を考慮した教材選定

近年、大学での英語教育について議論する際、ESP (English for Specific Purposes) やEGP (English for

General Purposes) という言葉が使われることが多いが、それらの用語の定義が人それぞれ異なるために議論がかみ合わないことがある。本稿では、図-5に示した田地野（2005）の定義を用いる。このモデルではESPがEOP (English for Occupational Purposes) とEAP (English for Academic Purposes) に分類されている。一般的に大学での英語教育の目的はEAPであるとされる。EAPはさらにEGAPとESAPに分類され、それぞれ、「主としてすべての専門分野に共通する学術的言語技能を対象とする英語」、「主として特定の専門分野に必要な学術的言語技能を対象とする英語」とされる。そして、EGAPとESAPは点線で結ばれ、連続体を成すと規定されている。

田地野は、このように分類した英語のうち、EGAPを全学共通科目英語での目的とし、ESAPを学部専門英語の授業での目的とすることを提唱している。筆者もこの考え方賛成するが、問題は、その二者で扱う教材の選定である。

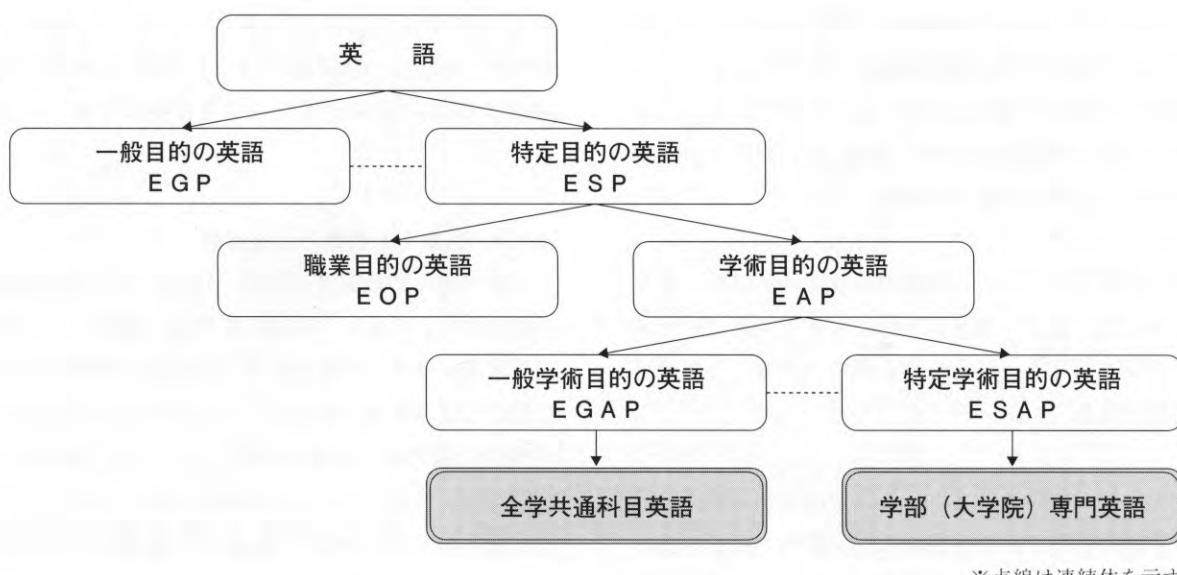


図-3 平成15、16、17年度の基礎工学部1回生のTOEFLスコア分布図

平成17年度のシラバスを見る限り、基礎工学部の学生を対象とした共通教育科目英語の授業であっても、学生の専攻科目を意識したテキストが採用されている例は極めて少ない。これは、1, 2年次にはEGP (English for General Purposes) の力を養成させるべきとの考え方から選定されたテキストだと思われる。

しかし前述のように、学生は、「簡単な日常会話しか聞くことができない」(92%)、「自分の言いたいことを英語で表現することは、ほとんどできない」(58%)／わ

ずかだけできる(38%)」と自己評価している一方、英語学習の目的として、「専門分野の研究活動のため」(29%), 「希望の職種に就くため」(20%), 「英語の資格試験を受けるため」(20%), 「海外で仕事をするため」(18%)と、非常に高度な英語力の習得を目指している。また、基礎工学部の教員は、「研究室に配属される学部4回生の時点で、英語論文の読解、執筆はある程度できるようになっていてほしい」、「専門分野の基礎レベルの語彙（英語圏の高校レベルで使用される語彙）は4技能

で使える形で習得してきてほしい」、「質疑応答も含め、英語でプレゼンテーションを実践できるようになってほしい」と強く要望している。こうした学生の現状のレベルと目標レベルとのギャップを鑑みると、1回生からESAPに近いEGAPから入り、継続的、そしてシステムティックに英語の指導を行ってESAPに繋げていく必要があると考える。

本学の教員からも教材選定の際に考慮すべき意見として以下のようなものが出ていている。

- 用いられる語学のテキスト、或いは目標とする語学能力を夫々の学部、専門分野にふさわしい形で考えて頂けると結構かと思います。
- 外国語修得は、必要性が強い興味かによって動機づけられるから、内容やテーマの選択ができるようにすべきであろう。
- 大学では専門教育のための語学を学ぶべきと思う。従って、教材は専門と結びついたものを選ぶべきだと思う。
- 理系では、英語の題材として科学評論等で、将来論文、英語の教科書を読める力をつけさせて欲しい。文章構造は余り複雑である必要はなく、速く読んで内容を要約出来る力をやしなうことが必要である。

こうした教員の声も含めて総合して考えると、図-5のように大学英語教育の目的を分類したとき、学部（大学院）専門英語として学部3回生から大学院生までに提供する授業では、「英語での専門分野の講義、講演会、論文」などを通して指導することが考えられる。一方、全学共通科目英語として基礎工学部1、2回生に提供する授業では、英語で専門分野を学習するための基礎力を養成するため、小、中、高校生が学ぶレベルの理数系の科目（科学、地学、化学、物理学、数学など）を英語で学ぶことが考えられるかもしれない。

筆者は前述のように、英語圏の小学校高学年向けのテキスト、*Everything You Need To Know About Science Homework*を副教材として採用している。このようなテキストを採用することで、学生のプライドを傷つけ、学習意欲を削いでしまう恐れはある。ただし、そのことに教師が留意して学生に対応すれば、書かれている内容に興味があり、背景知識を豊富に持っているため、学生は積極的に取り組む姿勢を崩さないようだ。また、小学生向けということで、使用されている英語が非常に簡潔で明瞭であるため、書籍内の文章を多読させることで発信

力を養成することも可能である。

4. 2 英語教師と基礎工学部の教師との緊密な連携

図-5にあるように、ESAPと連続体をなすEGAPを目的とした英語授業を展開するのであれば、誰が授業を担当するのがもっとも相応しいと言えるのだろうか。選択肢としては、英語教師が単独で指導する、学部の教師が単独で指導する、双方の教師が協力し、チームティングをする、という三者が考えられる。

まず英語教師が単独で指導する案についてだが、英語教師は、英文法や英語圏の文化など、それから英語を効果的に指導するための英語教授法については熟知しているかもしれない。だが、たとえネイティブスピーカーであったとしても基礎工学の分野について深く理解していないのであれば、単独で対面授業を実践することは難しい。

次に、各学部の教師は、専門分野の知識が豊富で、英語コミュニケーション活動に不自由しないレベルの英語力があったとしても、英語の教授法を知らないのであれば、授業を効果的に進めることは難しいと言える。これは、日本語のネイティブスピーカーである我々が、母語である日本語を外国人に効果的に教えられるかどうかを考えてみれば納得できるであろう。言語を操ることと、それを他人に教えることは別物なのである。

これらのことから、EGAPまたはESAPといった学生の専門分野よりの内容を扱う英語授業を成功させるためには、英語教師と学部の教師が、それぞれの専門分野の知識を提供し合い、緊密な連携をとりながら授業を作り上げていくのが理想的な形態と言えそうであることが分かる。

二者の連携が重要であることは、次の事実からも明らかである。まず、筆者の英語授業の受講生を対象としたアンケートから、「専門分野で使用される英語を習得したい」と多くの1回生が意思表示をしているにも関わらず、「実際、何を学習すればよいのかわからない」という学生が大部分を占めることが明らかとなった。また、「どの程度の英語力があれば、専門課程での研究で困らないレベルと言えるのか分からず」、「自分の目標をどのあたりに設定すればよいのか分からず」という学生の声も頻繁に聞かれる。現状と目標の間のギャップが大きい場合、長期にわたる継続的な学習が必要とされるので、本当に英語の必要性を痛感してから開始するようでは遅い。このため、学生が表明しているような高い目標に到達させるためには、教師は、教材の中身の指導に加

え、学生に英語の必要性を認識させる、目標とすべきレベルの具体例を示す、学生の目標やニーズを考慮し、適切な教材を選定して提供する、といった役割も求められるだろう。こうした部分において、学生のモデルともなる学部の教師が果たす役割は非常に大きいと言える。

また、「自分の英語力は満足するレベルに達していない」と表明した受講生が100%であり、そのうち87%が「単語力がないことが一番の原因」と自己分析している。この結果を受け、基礎工学研究科の教師2名に協力していただき、「理系学生のための語彙リスト」(物理学、生物学、脳科学、数学、化学、共通、といった分野ごとに数十語ずつ、計369語)を作成していただいた。このリストを学生に提示したところ、以下のような反応を得た。

専門でこのような語彙が必要になるのなら、これからぜひ学習して身につけていきたい。藤田先生が推薦しているなら、なおさら。

こうした言葉は複数の学生から聞かれた。仮に、同じ語彙リストを英語教師が作成して提示していたら、同様の反応は得られなかっただと思われる。やはり、学生たちのモデルとなる専門課程の教員が、実体験をもとに提示するものや言葉であるからこそ、学生は強い興味を示すのである。

5.まとめ

本稿では、基礎工学部生を対象とした英語教育を効果的に実践するための方策について考察するため、まず学生の英語力の実態を、続いて、英語学習の目的および目標について観察した。双方とも、学生自身と教師のアンケート調査への回答、TOEFLスコア、語彙力という4つの側面から観察したところ、現状の英語力と比較して、非常に高い目標を学生自身が持っている、あるいは要求されていることが判明した。このギャップを埋めるためには、膨大な学習時間と長期にわたる継続的な学習が必要となるが、その学習を効果的に行わせるための方策として2つの提案を行った。今後、より具体的にこれらの提案について考察し、基礎工学部生向けの教材の開発、および授業実践に繋げたいと考える。

参考文献

- 大阪大学言語文化部 (2004)『平成15年度TOEFL-ITP実施に関する報告書－結果と分析－』
大阪大学言語文化部カリキュラム検討委員会 (1998)『大阪大学

- における外国語教育改善に関する調査報告（総括）』
大阪大学大学教育実践センター・言語文化部 (2005)『平成16年度TOEFL-ITP実施に関する報告書－結果と分析－』
田地野彰 (2005)「第1章 大学英語教育への提言」『これからの大大学英語教育』、岩波書店、pp.1-46.
竹蓋順子 (2000)『大学英語教育における複合システムの実践的研究』、千葉大学自然科学研究科 (博士) 論文
竹蓋幸生、水光雅則編 (2005)『これからの大学英語教育』、岩波書店。
竹蓋幸生、与那覇信惠、草ヶ谷順子 (2006印刷中)「-learning の光と影に関する実証的研究」、『文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学紀要』、pp.1-16
羽鳥博愛他 (1979).『英語指導法ハンドブック 4〈評価編〉』大修館書店
Kelly, Kate and Anne Zeman (2004) *Everything You Need To Know About Science Homework*, Scholastic Reference.
Nation, Paul (1990) *Teaching and Learning Vocabulary*, Heinle and Heinle, Boston, MA.

(くさがや じゅんこ

サイバーメディアセンター・助教授)